

地上と宇宙を粘土でつなぐ きぼう利用宇宙モデリング

彫刻家の米林雄一氏（東京芸術大学名誉教授）が代表研究者を務めた

「宇宙モデリング」の試みが、2008年8月に国際宇宙ステーション（ISS）の「きぼう」船内実験室で行われた。「文化／人文社会科学利用パイロットミッション」の一環として、ISS第17／18期長期滞在クルーのグレゴリー・シャミトフ宇宙飛行士が担当したのは「未来のヒトを想像しながら、粘土（手芸や工作で使われる軽量粘土）でひとがたを2体製作する」というミッションだった。文／喜多充成

つまりは「宇宙で粘土細工する」ということだが、しかしシンプルなもの行為の背後には人間と芸術に関わる深い意味が込められている。

そもそも彫刻は人類最古の表現形式だ。初期の作品はおそらく、つくり手であるヒトを模倣したひとがたであつたろう。そして彫刻という行為は、製作を通じて作品と自分の内面との関係をつくっていくことでもある。自分と作品の間の密な交流があつてこそ、作品は光を放つ――。

そうした背景を踏まえ「宇宙モデリング」を提案したのが当時東京藝大教授だった米林氏だ。長い準備期間を経て実施にこぎつけたのは昨年8月12日未明のこと。ISSからのリアルタイム映像を筑波宇宙センターで見守った米林氏はこう振り返る。

「粘土をこね始めたら、饒舌だつ



「ひとがた」を製作中のシャミトフ宇宙飛行士（左、NASA提供）と地球帰還後、米林氏に届けられた作品

たシャミトフさんが次第に無口になっていった。つくりながら考え、評価し、また手を加えるプロセスに集中していくのがよくわかりました。1体がふわふわと宙を漂いながら2体目に取り組む様子もよかったが、最後に見せてくれたのが、なんともいえない、いい笑顔。宇宙飛行士のあんな笑顔は見たことがなかったですよ（笑）

2体の作品はシャミトフ宇宙飛行士とともに地球に帰還し、米林氏の手許に届けられた（写真はそのうち1体）。そしてここまですがミッションの前半部分。

地上での創作活動を 宇宙とつなげる

あとの半分を担当するのは、地上の子どもたちである。宇宙飛行士の活動をビデオで見た後、同じ粘土で「ひとがた」に取り組むワークショップが、東京藝大のお膝



米林氏が手にしている金属のケースは、ISSに軽量粘土を運び、作品を持ち帰ったフライト品（実物）

米林雄一

Yonebayashi Yuichi

東京芸術大学名誉教授。1942年東京都生まれ。金沢美術工芸大、東京藝大で彫刻を学び、東京藝大で教鞭を執る（2008年春まで）。「きぼう」利用関連では「宇宙手形」「宇宙モデリング」などを提案し、実施した。

時系列で記されているだけでなく、たとえば土偶などのようなさまざまな文化が生んだ「ひとがた」の写真が、そしてワークショップで製作を終えて喜ぶ子どもたちの笑顔の写真も付されて

いたのだという。

「宇宙へ送った粘土、余ったんじゃないかと思つていますが、われわれのものには戻ってきていない。たぶんシャミトフさんが何かをつくり、自分のお子さんにでも持ち帰ったのではないでしょう

か」
宇宙飛行士もまた創作を通じ、地上と意識を通わせていたに違いない。